教会ミニかまくらの祝福(2019.2.17)

「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、
食べる人には糧を与える。」(新共同訳イザヤ 55:10)

降り積もる雪を逆に祭りにして楽しむ、そんな開き直った強さを横手の人々に感じさせるのがかまくらだ。今年も 2 月の 15 日,16 日に開催された。横手教会は、かまくら会場間を結ぶ通路に面していて、観光客が教会前を通り過ぎる。それで、教会もミニかまくらを造り、教会堂をライトアップして、幻想的なマッチングを楽しんでもらってきた。Web 上では「地元民しか知らない隠れた絶景ポイント」と書き込まれるほどで、立ち止まって写真を撮っていく人が多い。

そこで昨年はこの 2 日間、オルガン伴奏に合わせて賛美することにした。相当数の観光客が会堂に入り、共に賛美を捧げることができた。今年の 15 日は、地元で活動している合唱団「四季」をお招きして、演奏会を、また、16 日は、オルガン・ギターの伴奏で賛美する会を開いた。教会員一人ひとりが持ち場・立場で捧げた祈り、流した汗を、主はみそなわし、両日ともに多くの方々が教会の敷居を越え、礼拝堂の中で、合唱と賛美を楽しんだ。四季の聴く者の心を揺るがす熱唱、オルガン・ギターに合わせて賛美する一体感がまだ余韻として残っている。

地域の方々の中には、水神様を祭るこの行事になぜ教会が関わるのだろう、と不審がる方もおられると思う。そこで、教会のかまくらに対するコンセプトは何か。そのアピールが上掲のみ言葉であり、チラシの中心にドンと記した。聖書は雨や雪を降らせるお方は、天地の創造主であり、イエス・キリストの父なる神である、と教える。これである。私たちの同胞は、雨や雪を降らせ、大地を潤し、私たちに食べ物を与える、人知を超えた存在を感じ取っていながら、聖書を知らないため、この存在を水神様などと表現する。

教会ミニかまくらが横手を元気にする一助となり、ひいては横手市民や観光客が創造主に思いを馳せる、そんなきっかけになってほしいと思う。